



桃太郎（31）

ほんの一時間も走ったと思うころ、へさきに立って向こうをながめていたきじが、「あれ、あれ、島が。」とさけびながら、ぱたぱたと高い羽音をさせて、空にとび上がったと思うと、スウツとまっすぐに風を切って、飛んでいきました。

桃太郎もすぐきじの立ったあとから向こうを見ますと、なるほ



桃太郎（32）

ど、遠い遠い海のはてに、ぼんやり雲のような薄ぐろいものが見えました。船の進むにしたがって、雲のように見えていたものが、だんだんはっきりと島の形になって、あらわれてきました。

「ああ、見える、見える、鬼が島が見える。」

桃太郎がこういうと、犬も、猿も、声をそろえて、「万歳、万歳。」



桃太郎（33）

とさけびました。

見る見る鬼が島が近くなって、もう硬い岩で畳んだ鬼のお城が見えました。いかめしいくろがねの門の前に見はりをしている鬼の兵隊のすがたも見えました。

そのお城のいちばん高い屋根の上に、きじがとまって、こちらを見ていました。

こうして何年も、何年もこいで



桃太郎（34）

行かなければならないという鬼が島へ、ほんの目をつぶっている間に来たのです。

四

桃太郎は、犬と猿をしたがえて、船からひらりと陸の上にとび上がりました。

見はりをしてしていた鬼の兵隊は、その見なれないすがたを見ると、びっくりして、あわてて門の中に



桃太郎（35）

逃げ込んで、くろがねの門を固く
しめてしまいました。その時犬は
門の前に立たって、

「日本の桃太郎さんが、お前たち
をせいはいにおいでになったのだ
ぞ。あける、あける。」

とどなりながら、ドン、ドン、
扉をたたきました。

つづく